

第26回福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会議事概要

I 開催場所および場所

日時：2024年2月2日（金）13:30～15:30

場所：富岡町立富岡小中学校（〒979-1111 双葉郡富岡町小浜中央237-2）

II 委員

別紙名簿のとおり

III 資料

議事次第・席次表

- 資料 1 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会委員名簿（2024/2/2版）
- 資料 2 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（第25回）議事概要
- 資料 3 令和5年度双葉郡教育復興ビジョン取組実施報告_240202
- 資料 4 各町村の現状と課題 資料
- 資料 5 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告資料
- 資料 6 令和6年度双葉郡教育復興ビジョン推進体制・委員会等の構成、取組一覧（案）
- 資料 7 令和6年度双葉郡教育復興ビジョン実施計画（案）
- 資料 8 【教育庁】福島県の教育復興の現状
- 資料 9 【R5文科省説明資料】避難指示区域等内における魅力ある教育環境づくりに向けて
- 資料 10 震災遺構浪江町立請戸小学校校内案内

IV 議事

1. 開会

1) 開会挨拶

○館下副座長（双葉町）

まず、元日に発災した能登半島地震の犠牲者へのご冥福と、被災者の皆様にお見舞い申し上げます。我々も13年前に地震と津波、原子力災害を経験したが、国や県はじめ関係団体の皆様のご支援とご指導を賜りながらここまで復興の道を歩んできたことに感謝したい。

昨年12月の「第10回双葉郡ふるさと創造学サミット」では、復興庁、文科省、県教育庁はじめ、各所より多くの方々に参観いただくとともに、8町村の教育長との意見交換を行うことができました。その他の広域の行事についても、コロナ禍で苦悩した時期もあったが、ICT機器を駆使してリモート開催できたことは貴重な成果であり、一つの経験値となった。統廃合も進められた環境変化にあって、双葉郡の教育復興は新たなステージを迎えている。本日は、今年度の振り返りと来年度の事業計画について、忌憚のないご意見をお願いしたい。加えて、過日、宮崎県の日向・東臼杵市町村振興協議会から講演依頼があった。これについては会の最後にご報告申し上げます。

2) 委員自己紹介（省略）

2. 前回（第23回）議事概要確認【資料2】

- ・双葉町「双葉小中学園」を「川内小中学園」に訂正（P2、3行目）

3. 議事

1) 今年度の各取組実施状況について【資料3】

○事務局（國分）〔全体〕

（個別具体的な内容は資料3のとおり）4年ぶりに対面で開催できたものが多く、各取組ともそれぞれ充実した内容で、交流も深まっている様子が見える。ただ、中高生交流会においては、「交流できたか」のアンケートの問いに対し、肯定的な回答が59%と必ずしも高いとはいえなかったため、よりつながりを

感じられるような内容を考えていきたい。地域学校協働本部の冊子については、今年度はリーフレットに変更する。「ふたばの教育」「ふるさと創造学実践事例集」についても完成しだい送付するのでご覧いただきたい。

○館下副座長（双葉町）（地域学校協働本部）

地域学校協働本部の本会議を川内小中学園内の地域伝承教室「コミュニティハウスにじいろ」で対面で行った。8町村の地域コーディネーターが全員集まり、各地域の実態に沿った形で情報共有できた。ただ、各地域で活躍する人材についても8町村で共有できるような「人材バンク」のような仕組みがあればよいのではないかと。そうした集積を各校の実践事例集等と併せて参考にできるようになれば、さらに情報共有の意義が発揮できるものと思われる。委員からは、8町村で連携して教育と地域復興の相乗効果を生み出すように頑張りたいという発言があった。

○青木委員（檜葉町）（中高連携協議会）

今年は久しぶりの対面で、広野町の未来館において、協議会会長である檜葉町の早川校長を中心に意見交換を行った。中高生交流会については、講師の人选や日程調整の難しさについての意見が出された。子どもたちにとっては貴重な機会であるため、引き続き関係者の協力をお願いしたい。ふるさと創造学サミットに関しては、以前から外部への発信力が弱いのではないかという課題があった。冒頭、館下教育長から宮崎県からの講演依頼があったとの報告があったが、今後さらにそうした機会を増やしていくことが大切だと考える。

○岩崎委員（富岡町）（ふるさと創造学サミット）

2014年に第1回を開催してから、今年度で第10回となった。会場はふたば未来学園で、対面とオンラインのハイブリッド開催となった。今回は、発表15分・交流15分と時間を設定して、交流に重点を置いたサミットとなった。サミット振り返りアンケートにおいては、これまでの「楽しかった」という感想から、「うれしかった」という感想に変わっていることが目に留まり、子どもたちは確実に成長していることを実感した。サミットは双葉郡で学ぶ子どもたちにとって大切な価値のある取組であり、今後も、どのような内容、運営方法がよいかさらに考えていきたい。

○佐藤委員（大熊町）（絆づくり交流会）

絆づくり交流会においては、学校の垣根をこえ、圧倒的な当事者意識で先生方が取り組んでいたのが印象的であった。中高生が中心となって運営に関わったことが、小学生にとってはよいロールモデルになったようである。ふたば未来学園高等学校において7月の開催であったが、熱中症が心配されるほどの暑さだった点が課題として残った。しかし、久しぶりの対面開催で子どもたちお互いの交流を深めることができたとともに、一時的にはなく常時つながりを持つにはどうしたらよいかという意見も教員から出てきており、次に向けての前向きな姿勢が生まれていると感じた。

○根本委員（広野町）（中高生交流会）

中高生交流会は、普段の学校生活では味わえない貴重な体験の機会であり、実行委員の先生方、会場のふたば未来の先生方、運営の事務局の担当者の献身的な協力により、今年度も成功裏に終えることができた。ただ、例年のことながら講師の選定に時間がかかることが課題である。実行委員の教員が内容を煮詰めて「交流」に焦点が当たるようにできればさらによかった。アンケートの「交流できたか」に対する回答率が低い要因はこのあたりにあるのではないかと。また、高校生の参加者がふたば未来学園高校生に限られてしまうので、浜通り地区のほかの高校生に参加の枠を広げて、より中高生の交流が深まるようになればよいと考えている。

○堀本委員（川内村）（双葉郡子供未来会議）

今年度の双葉郡子供未来会議では、福大の坂本先生からの講話のあと、グループごとに悩み事の大相談会を実施したところ、ふるさと創造学やサミットに対する困り感が数多く出された。主には時数確保について、また、子どもたちの主体性を引き出す課題設定についてであったが、対話に慣れさせるための普段からの指導や、子どもたちに任せることの重要性についての意見もあった。今回、グループで討議したことで横のつながりができたため、教員相互で困った場合は連携を取り合いながら来年度の教育課程編成に生かすなどの展開を望んでいる。今の子どもたちは震災を経験していないため、目的意識を明確にしながらかれからも取り組んでいきたい

○松本委員（葛尾村）（ICT 活用・広報委員会）

ICTについては、国の「教育のICT化に向けた環境整備5か年計画」に基づいて各学校で進めている。ICTはいまや教育の現場では不可欠なツールとなっており、少人数教育においても有効に活用できるものである。昨年10月11日の委員会では、各学校のICT活用事例について情報共有が図られており、これらの内容が今後生かされるものと期待をしている。

広報については、「ふたばの教育」の作成が着々と進んでいる。双葉郡では8か町村が連携して魅力的な取組を進めているが、これを外部に向けて発信し、広く知ってもらうことは重要であり、今後、読者アンケートの結果を次回の誌面づくりに生かすなど、工夫を重ねていきたい。

○笠井委員（浪江町）（ふたば生徒会連合）

生徒会連合のこれまでの経過を見るにつけ、子どもたち自身や生徒会連合という組織としての著しい成長を感じ、うれしく思っている。オンラインと対面とで8回のミーティングを開催したが、Google Classroomの扱いにも慣れ、意見のやり取りがスムーズにできている。また、リーフレット作りのアイデアを事務局に投げかけるなど、自分たちが何か力になりたいという意欲にあふれている。このように、双葉郡で学ぶ子どもたちの気概や、その高まりを実際の活動に見ることができることは頼もしいことであり、生徒会連合の活動が、各学校の生徒会活動だけでなく、教育活動全体に波及し、双葉郡を盛り上げるひとつの基盤になればよいと思っている。

○中田座長（放送大学）

〔感想〕今年5月にコロナ感染症が5類になり、対面による交流が再び可能になったため、子どもたちにとって実感を伴った交流ができたといえる。一方で、交流に関して十分とはいえない結果も一部にあったが、これについては、子どもたちが交流についてより高い質を求めるようになった可能性も考えられるため、今後、検証が必要であろう。いずれにせよ、経験が積み上がってきているのは各報告のとおりである。

○八木委員（文部科学省総合教育政策局）

〔感想・質問〕それぞれの取組で充実した交流を行っていることがうかがえる。コロナも5類に移行し、これからますます体験活動も増えていくと思われるが、質を上げていくという観点で、福島県には国立青少年教育振興機構の青少年施設が磐梯と那須甲子にあり、こうした施設も活用いただくこともありうるのではないかと。そうした取組を今後検討することが可能なかどうかお尋ねしたい。

○石垣委員（復興庁原子力災害復興）

〔感想〕非常に充実した取組で、感心しながら、また、感動しながら聞いていた。中高生交流のところ、ふたば未来だけではなく、広く双葉郡の生徒にも広めたいというのはすばらしい提案である。時間が取れないというのはあらゆるテーマに共通する悩みであるが、すばらしい双葉郡の歴史・文化・伝統について、総合学習だけではなく、いろいろな科目の中に埋め込む工夫をしながら取り組んでいただきたい。

○中野委員（復興庁福島復興局）

〔感想〕子どもたちの交流が深まっているというすばらしいお話を伺った。まちづくり、コミュニティづくりの拠点としても学校は大きな存在であり、子どもたちの果たす役割は大きい。今後、学校の外にもどんどん展開していき、さらによいまちづくりにつなげていただきたい。

○堀家教育総務課長（福島県教育庁）

〔感想〕わが国においては、今後、人口が減少し、自治体の規模も小さくなることが想定される。そうした中で、町村の枠組みをこえた教育活動はこれからの日本の公教育に求められるものであり、この意義を共有したい。また、コロナ禍が明けて対面で交流する重要性の指摘とともに、ICTの活用が進んでいるという報告もあった。リアルとデジタルそれぞれの強みや特色を生かした交流のあり方を模索するという段階に入っていると思われる。この点においても先進事例になるようなものが抽出されているので、それを対外的にPRしていくことも必要だと感じている。

○浅野委員（文部科学省初等中等教育局）

〔感想〕「ふるさと創造学サミット」に参加し、子どもたちが非常に熱心に活動している様子を拝見した。ただ、聞いている側の子どもたちもタブレットを持つことで、より活発に意見のやり取りができたのではないかと、一生懸命な先生ほど沈黙の時間に耐えられなくなってしまっていたので、子どもたちの自発性が出てくるまで辛抱強く待っていただくことも必要ではないかと感じた。いずれにしても、地元さまざまな材料を使って自分の興味・関心を伸ばしていこうというすばらしい取組であった。

2) 各町村教育委員会の現状と課題【資料4】

○館下副座長（双葉町）

現在、双葉南、双葉北小学校の創立150周年と、仮設校舎10周年を祝う会の準備をしており、記念誌も作成する予定である。また、今年3月15日から20日まで、双葉町立学校生徒海外派遣事業として英国を訪問する。生徒代表として中学2年の5名が渡英するが、学校訪問先では日本の習字を紹介して交流しようと準備をしているところである。双葉郡の中で双葉町だけがまだ本町での学校再開ができていないが、今年度は学校設置検討委員会において教育基本構想の構築を進めており、令和6年度は教育基本計画、令和7年度には学校再開についてお示しできるようにしたいと考えている。

○笠井委員（浪江町）

こども園10名、小中10名からスタートした園児・児童生徒数が、現在では120名を超えるまでとなった。複式にならない教員の配置は、転入する保護者の安心につながっている。また、特別な支援を要する児童生徒に対する環境整備においても弾力的に対応していただいております、引き続きよろしくお願ひしたい。11月に開催した子ども議会では、地域づくりに関わろうとする子どもたちの思いが表れており、生徒会活動においては自主的に能登半島地震への支援活動の声が上がった。生徒たちが「町の復興」や「地域の復興」という言葉を日常的に用いていることに確かな育ちを感じている。今後、F-REIとの連携強化による教育活動の伸展も図っていききたい。

○松本委員（葛尾村）

就学状況については資料のとおり極少人数で、帰村率はいまだに29%、村内居住者数の約3分の1程度は移住者となっている。少人数であることは、児童一人一人に目が行き届く利点もあるが、団体競技ができない、対話の相手が固定化するなどデメリットも多い。これを補うため、郡内または近隣市町村との交流事業やオンライン授業を活用している。ふるさと創造学サミットや小学生絆づくり、中高生交流会など、他校の子どもたちとの交流は貴重な経験であり、自分の考えをしっかりとって生きる力を養ってもらいたい。また、浪江町にF-REIが誕生しているが、子どもたちが最先端の技術・研究を身近に感じられるよい機会であり、村としても何らかの形で関わっていききたい。

○佐藤委員（大熊町）

大熊町立学び舎ゆめの森が今年の4月に12年ぶりに帰還した。こども園も接続し、0歳から15歳までの一貫教育を行っている。オンライン等の手段も交え情報発信に努めたところ、関西から転校する事例もあり、魅力的な教育活動の発信が住民を増やすことにつながると実感した。今後は、学校が核になったコミュニティ形成や社会教育事業の充実にも力を注ぎたい。また、「ふたば」構想の各種事業はイノベ機構の支援あつてのことである。引き続き連携をしていくとともに、義務教育課程で育てた子どもたちが、その先においてF-REIとつながれる体制など、地域の未来を担う人材育成の持続可能な展開を図っていききたい。

○岩崎委員（富岡町）

現在、校舎西側に新しい放課後児童クラブを建設中で、4月から運用を開始する。「教えすぎない、口を出しすぎない、手を出しすぎない」というコンセプトで運営していききたい。富岡町では、毎月11日を「防災・安全の日」に設定し、防災に関する学習を進めているが、能登半島地震が発生したことを受け、やはり繰り返し行っていくことの重要性を確認した。今年度のサミットは交流を大事にするものであったが、課題としていた教職員の意識改革を念頭に交流の部分を各教員に任せるところ、それぞれが工夫しながら取り組む姿につながった。富岡町では、毎年、入学式前に教員研修会を行い、現在に至った経緯や目指す姿を確認している。若い教員が多いため、これは今後も継続していききたい。

○堀本委員（川内村）

（訂正：資料4・川内村：町村学校名に「かわうち保育園」を追加）義務教育学校ができて3年目、志賀校長に圧倒的な信頼を置きながら、子どもも教員も主体的に取り組んでいる。また、校舎内の地域文化伝承教室「コミュニティハウスにじいろ」の利用者が年々増えており、川内の復興の拠点となっている。村は各大学と包括連携協定を結んでいるが、特に福島大学では「むらの大学」という地域実践学習を実施しており、川内村に移り住んで酒造りに取り組もうという青年も現れるなど、生きた教育につながっている。令和6年度中に村役場庁舎建設のため教育委員会が旧中学校に移転する。学校については、残念ながら次年度から教員が減ってしまうが、SC、SSWの配置と教員加配の継続をぜひお願ひしたい。

○青木委員（檜葉町）

復興事業は、現在はソフト事業にシフトチェンジし、特に教育は将来の人口を左右するため、さまざまな施策を行っている。小学校内の余裕教室を活用して協働センターを設置したが、その取組が地域総ぐるみのキャリア教育であると評価され、第12回キャリア教育推進連携表彰で優秀賞を受賞した。国際交流については、東京オリ・パラ2020におけるホストタウンのつながりでギリシャとの交流が始まっている。スポーツ振興においては、JFA アカデミー福島的女子中学生・高校生が4月から檜葉の寄宿舍で活動を再開する。このことが檜葉の子どもたちにとってよい刺激になると期待している。令和6年度は震災以降初めて1学年が2クラスの複数クラスになる。スタート時の倍以上の人数で教育活動ができることに感謝したい。

○根本委員（広野町）

広野町では、指導の一貫性の保持のため、異校種間で連携を図りながら普通教育の推進にあたっている。学校図書館については、南都隣山会の義援金を図書購入に充て、図書システムを導入するとともに司書を配置した。グローバル人材育成の推進においては、東日本国際大学の留学生との交流のほか、天栄村ブリティッシュヒルズでの活動を充実させている。教育環境の整備として、小学校の大規模修繕、共同調理場の改修、中学校は建て替えを検討している。震災以降、さまざまな支援をいただき感謝している。帰町後、町民は人に頼る傾向が強い。これを脱却するため、地域住民が主体的に学校づくりやコミュニティづくりに関わる取組を展開したい。

○石垣委員（復興庁原子力災害復興）

〔感想〕国際化に関連したいくつかの取組の紹介があったが、私が世界銀行の復興まちづくりのセミナーに赴いて福島の復興の話をしたところ、チェルノブイリを抱えるウクライナの方は福島原発被災地に人が住んでいることに非常に驚いていた。また、コソボでは、紛争によって避難し、その避難が長期化すると住民が地元に戻ってこないという悩みを抱えていた。このように、世界的にみても双葉郡での取組は非常に貴重なものであり、それを乗り越えてきた経過は、国内はもちろん世界に積極的に発信する価値あるものだと考えている。また、F-REI に関連においては、海外からの研究者受け入れのために学校の国際化対応は重要な課題であり、地域の皆さんのご協力を仰ぎながら進めてまいりたい。

○八木委員（文部科学省総合教育政策局）

〔感想〕文科省としては、コミュニティスクールと地域学校協働活動は2つの車輪として進めており、補助金等も活用しながらさらに推進していただきたい。また、毎年、コミュニティスクールの全国協議会を行っているが、来年度は11月に金沢で開催予定である。地域コミュニティと防災は親和性があり、有益な内容であるので、参加いただける場合には積極的に出席いただけるとありがたい。

3) ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告【資料5】

○郡司委員（ふたば未来学園）

中高とも定員フルの新入生を迎えて2023年度をスタートさせ、寮生も200人を超えている。今年も本校を会場としてさまざまな行事が実施された。反省点として、「絆づくり交流会」では暑さ対策、「ふるさと創造学サミット」では寒さ対策の問題があったが、内容としてはいずれも復興を実感するものであった。また、今年度からWWL拠点校としての取組を始めており、新たに東北大学と連携協定を結び、オンラインで大学の講義に参加している。加えて、アフターコロナにあって、生徒たちは運動部・文化部ともにすばらしい実績を残した一年であったことを報告したい。

本校は来年度で開校10年目の節目の年を迎えるが、まだまだ支援が必要な状況である。一方で、域外からの新たな活力の呼び込みが移住・定住促進につながっていると認識している。現在、F-REI 関連で世界レベルでの研究者のご子息を受け入れる環境を整えている。IBには至らないまでも、WWLでそれに近いことができると考えている。

イノベーション・コースト構想と双葉郡の教育復興ビジョンの実現は重要なミッションであり、将来、この地域の未来を担う志を持つ若者を、双葉郡で、そしてふたば未来学園で育ていけるように頑張っていきたい。私の決意としては、ふたば未来学園が廃炉が終わる30年後まで輝き続ける学校として保っていくために、「感謝」と「挑戦」を心に刻んでまい進していきたい。

4) 令和6年度推進体制・行事計画(案)について【資料6】【資料7】

○館下副座長(双葉町)

令和6年度双葉郡教育復興ビジョン推進体制については資料6、双葉郡教育復興ビジョン実施計画(案)については資料7のとおりである。特に、「推進計画第4期作成会議」については、これまで積み重ねてきたことを踏襲しながら計画を作成し、次回には大枠のことがお示しできるようにしたい。これら推進体制と行事計画について承認いただきたい。

○中田座長(放送大学)

〔質問〕先ほどあった泊付きでの実施については、一気に全員が体験宿泊はできないにしても、部分的に各学校の中経験を積み重ねることを今後の検討に入れるということでしょうか。

○館下副座長(双葉町)

〔回答〕八木総括官から県内の青少年施設を利用する計画はないかとの質問があったが、被災12市町村中の田村市では「F2サミット」という1泊2日の事業を実施しており、そうしたところとの連携や、さらには県外も含めて、我々の課題として検討してまいりたい。

・令和6年度推進体制・行事計画(案)については承認された

4) その他

(1) 委員からの情報共有

○堀家教育総務課長(福島県教育庁)【資料8】

複雑かつ多様で見通しが見えない「VUCAの時代」にあって、日本や世界を取り巻く大きな社会の変化に加え、福島では今後30~40年かかる復興という二重の大きな課題に直面している。しかし、そこで行われている福島の教育は、分断を乗り越え、価値を生み出す力の育成にもつながっていくものである。また、「極少人数」下での魅力ある教育の推進については、少子高齢化が進む中での先進的な事例と認識している。生産年齢人口の減少や資源に乏しい我が国においては、イノベーションを通じた価値の創出が重要である。国に対しては継続的な支援をお願いしているが、引き続き各町村の双葉地区教育長会の皆様と志をひとつにして取組を進めていきたい。

○小畑教育制度改革室長(文部科学省初等中等教育局)【資料9】

私ども文部科学省では、震災・原発事故の影響に鑑み、厳しい教育環境下に置かれている被災児童生徒に対してさまざまな支援策を用意している。就学支援、教職員の加配、スクールカウンセラーの配置ほか、公立学校施設整備や福島イノベーション・コースト構想を支える人材育成基盤の構築など、基本的には今年度措置しているものと同様に、来年度においてもしっかりと予算を確保していきたい。ただ、ご承知のとおり、令和3年3月9日に閣議決定された『復興・創生期間』における東日本大震災からの復興の基本方針の変更については、第2期復興・創生期間の5年目にあたる令和7年度に復興事業全体のあり方について見直しを行うことになっている。このことも視野に入れつつ、皆様方それぞれのご要望を丁寧に向いながら、双葉郡における教育の復興に向けた支援に努めてまいりたい。

○館下副座長(双葉町)

宮崎県の日向・東臼杵市町村振興協議会から、ふるさと創造学や教育復興ビジョンについて、先進事例として講演依頼があった。かねてより双葉郡教育復興ビジョンの取組成果を外部に発信するタイミングを模索していたため、願ってもないオファーだと考えている。もちろんバックボーンは異なるが、中田座長と共に宮崎を訪れて我々のこれまでの取組を紹介し、次回にはその結果を報告させていただきたい。

○中田座長(放送大学)

双葉郡の取組は、原発震災からの復興を契機とするものの、全国に共通している地方の人口減少・高齢化の課題を受ける中で、人材育成にどうチャレンジしていくのかという意味合いが大きい。これまで双葉郡は全国から支援を頂いた。宮崎では、その感謝の意を込めつつ、これまでの積み重ねを報告してまいりたい。

(2) 今後の協議会開催予定

・次年度は27回協議会を5月に、28回協議会を来年2月に開催予定である。

4. 閉会